

爽やかDD太一くんのスケベファン ド 上のサンプル

## 登場人物

### 御堂太一（みどう たいち）

20 歳。男。大学生。

父親の御堂恵一郎が恩師の甥の借金の連帯保証人となり、1 億 8000 万円の負債を背負ったことから、スケベファンドに手を出してしまう。

### 香月智雄（こうづき ともお）

58 歳。男。大学教授。

父親の負債を理由に退学しようとする太一にスケベファンドを紹介する。

### 御堂恵一郎（みどう けいいちろう）

56 歳。男。ガラス工芸職人。

御堂太一の父親。恩師の甥の借金の連帯保証人となったことで1 億 8000 万円の負債を背負ってしまう。

### 大隅（おおすみ）

21 歳。男。大学生。

御堂太一がスケベファンドを始めたと知り、辱めるために積極的に支援をするようになる。

## 第一話 全裸命令権

「スケベファンダ、ですか？」

御堂太一（みどう たいち）はゼミの担当教授である香月の言葉を繰り返した。

「ああ、スケベファンダだ。

このファンダならば、御堂くんの問題も解決が容易になるだろう。

少なくとも、大学を中退して就職するよりは」

髭を整えた穏やかな紳士の風貌の香月の言葉に、太一は爽やかイケメンと称される普段ならば明るい表情を曇らせた。

太一の問題……

それは、父親の恵一郎が家族や親類の反対を押し切って借金の連帯保証人になってしまったことであった。

それだけならば、まだよかったのだが、その相手が夜逃げをし、恵一郎が1億8000万円の負債を背負う羽目になったのだ。

当然、両親の貯金で大学に通っている太一にもその影響がある。

だから、太一は今学期限りでの退学の報告をするために香月の部屋を訪ねたのだが、そこで聞かされたのが「スケベファンダ」という、聞きなれない言葉であったのだ。

「考えても見たまえ。

中退大学生が就職したところで、1億8000万円の借金の返済をする余力があるかな。

こう言うてはなんだが、顔以外にとりたてて取り柄のない君が1億8000万円を稼ぐ前に、お父上の資産が差し押さえられる方が先だと思うな。

まだ、芸能界入りした方が、望みがあるというものだ」

香月の言葉に太一は反論できなかった。

恵一郎は昨年実家のガラス工房を拡張したばかりで、現金資産に乏しいのだ。

だから、家族も親類も連帯保証人になることに反対をしたのだが、恵一郎は「恩師の甥の頼みだから」と引き受けてしまった。

……引き受けてしまったのだ。

「私としても、前途ある学生が親に足を引っ張られて中退をするというのは後味が悪いものでね。

だからこそ、スケベファンダだ。

支援者の皆様への感謝の気持ちとして、様々なスケベを提供するのだよ」

「……ですが、それって身売りですよね」

「まあ、そうなるね」

太一の困惑に香月が当たり前の事実を認めるかのように頷いた。

「だが現実問題、君には、それほど選択肢はない。

お父上の借金を放置するのならば、君は奨学金申請をすれば卒業までは何とかなるだろう。

けれど、君はそうしたくないから、退学の相談に来た。

違うかね？」

香月の言葉に、太一は反論できなかった。

香月の言葉通りだったのだ。

家族や親類の言葉を無視して連帯保証人になるような父親を見捨ててしまえ、と悪魔が囁いたのは事実だ。

けれど、太一は父親である恵一郎を尊敬している。

恵一郎からガラス工芸を取り上げるようなことはしたくなかったのだ。

しかし……

香月の指摘通り、太一が普通に就職したとしても1億8000万円の借金をどうにかできるとは考えられない。

「安心したまえ、御堂くん。

スケベファンドは公的機関だ。だから、手数料も良識的な範囲内であり、支援金の未払い問題なども起きない。

私たち、紳士による紳士のための組織だからね。

簡単な問題だよ、御堂くん。

君は、お父上のために身体を差し出せるかどうか。

ただそれだけだよ」

香月の言葉に太一は何も言えなかった。

ごく普通の家庭で一般的な良識を教え込まれた太一にとって、身売り行為は汚らわしい行為でしかない。

だから、それが父親である恵一郎が背負った借金を返済するために有効な手段であるとしても、抵抗は根強い。

その一方で、恵一郎を助けたい、という思いも強かった。

身売り行為への抵抗感と父親への思いを秤にかけて、太一は悩んだ。

二つの皿は上下に揺れ、太一の価値観を揺さぶる。

「……何をすればいいんですか？」

太一は決断した。

身体を売ろう、と。

太一が恵一郎のためにできるのはそれぐらいしかないのだ、と己の身体を投げ出す決意を固めたのだ。

恩師である香月がここまで勧めるのならば、悪いものではないだろう、という期待もあったのだ。

「では、私が君をスケベファンド機構に紹介する。

君は、個人情報を入力し登録を済ませればいい」

香月がパソコンを操作し、スケベファンド機構新規会員登録画面を表示させた。

香月に手で促され、太一は香月のパソコンを操作し、会員登録を始めた。

身長 174 センチメートル、体重 69 キログラム。

普段履いている下着……青のボクサーパンツ。

オナニーを覚えた年齢……11 歳。

チン毛が生え始めた年齢……14 歳。

チン長……平常時 4.6 センチ、勃起時 13.4 センチ。

セックスの経験……なし。  
アナルセックスの経験なし。  
オナニーの頻度、週に3回程度。  
フェラチオの経験……なし。  
目標金額……1億8000万円。

友人に尋ねられたのなら恥ずかしさで顔が赤くなるような質問に太一は回答していく。  
性的な質問に答えるたび、太一の良識と羞恥心が軋み、顔が赤くなる。  
けれど、太一はそうした抵抗を抑えて、必死に回答をした。  
そうして、すべての質問に答えた太一は、登録審査を申し込む、のボタンをクリックした。  
画面に「A Iによる登録審査中です。しばらくお待ちください」と表示される。  
太一は祈るような思いで画面を見ていた。  
審査に通ってほしい。そうしなければ、父親の助けになれない。  
審査に落とされてほしい。そうすれば、身売りをしないで済む。  
太一の心は乱れ、震え、その額には汗が浮かんでいた。  
画面に表示されている審査進行度が徐々に増えていく。  
太一は己の心がどちらに傾くのか分からない。  
考えたくなかった。  
やがて、審査進行度が100%になった。

「おめでとうございます。御堂太一さんをスケベファンด์機構に登録いたします」

画面にその表示が出た時、太一は落胆の息を漏らした。  
一度は決意をしたのに、太一の良識と羞恥心が身売りをすることに抵抗を示したのだ。  
けれど、これで、父親を助けることができる。  
太一は悲鳴を上げる己の良識と羞恥心を必死に抑え込んだ。

「つきましては、プロフィール画像として、ヌード写真のアップロードをお願いします」

画面に表示された文字に、太一は心臓が締め付けられるように痛んだ。

ヌード写真！

つまり、全裸になってそれを、多くの人の目につく形で表示しろ、というのか……

「何を驚いているのかな、御堂くん。

君は、これからスケベファンด์で身売りをするのだよ。

全裸程度で臆しては、1億8000万円の借金を返済することなど、夢のまた夢だよ。

脱ぎなさい」

香月の言葉はその通りであったのだが、太一は己の良識が邪魔をしてすぐに動けなかった。

「次はない。

私が撮影してあげるから、脱ぎなさい」

香月が太一に決断を強要する。

太一は悲鳴を上げる良識と羞恥心押し殺して立ち上がった。

「香月教授、お願いします」

太一は頭を下げてから、服を脱ぎ始めた。

太一はベルトを外し、シャツを脱いだ。

染み一つない肌に筋肉が程よく乗っており、筋肉質とは言えないがスポーティな印象を与える滑らかな肉体であった。

その肉体には、爽やかな顔立ちに釣り合う体毛の薄さであった。腋毛は生えているが、胸毛は産毛のように薄く、エステで整えていると言われても疑問に思われないほどに清潔感のある肉体であった。

太一がジーンズを脱ぐ。

引き締まった足には脛毛や太ももの毛などのムダ毛が見当たらない。

太一は元々、体毛が薄い体質なのだ。

青のボクサーパンツ一枚になった太一の手が止まった。

太一の目が揺れており、その表情に迷いを見出すことは難しくないだろう。

「御堂くん。

お父上の借金を放置するつもりなのかね？」

香月に父親の借金のことを言われては、太一は動かないわけにはいかない。

ほどほどに膨らんでいる股間を片手で隠し、太一はもう片方の手でゆっくりと青のボクサーパンツを下ろしていく。

そうして、太一は香月の教授室で全裸になった。

太一には露出の趣味はない。

だから、屋内とはいえ、全裸になるべきではない教授室で全裸になってしまったことに心臓が締め付けられるほどに申し訳ない気持ちになり、背中を冷たい汗が流れ始めた。

「御堂くん。

何を恥ずかしがることがある。

君は、スケベファンで身売りをするのだよ。

さあ、股間を隠す手を身体の側面に置いて、姿勢を正しなさい」

香月がスマートフォンを構えたまま、太一に指示を出す。

そうだ……

太一は、己の意志で、父親の借金を返済するためにスケベファンで身売りをすることにしたのだ。

だから、この手を下ろし、辱めに耐えるしかないのだ。

太一の手がゆっくりと股間から離れていく。

整えられたかのように薄く、不潔感のないチン毛と人並みの大きさの仮性包茎ペニス露わになる。

香月の目の前で、太一が全裸になり、無防備な股間を晒した。

全裸となった太一は雄臭さがほとんど感じられない清潔感溢れる肢体であった。

筋肉もバランスよくついており、股間には雄のシンボルであるペニスがぶら下がっており、その全身には生物学上の男の特徴が現れているというのに、太一には雄特有の臭いが感じられないのだ。

友人たちに爽やか太一と時には揶揄を込めて呼ばれるだけはある清潔感であり、男のシンボルであるペニスも、生臭さや男臭さを感じさせないものであった。

香月が太一の全裸を撮影する。

シャッター音が教授室に響き、太一の痴態が電子情報として収められる。

プロフィール画像としてスケベファンD公式サイトに登録されるために。

勉学の間である教授室で一人全裸となっていることに、太一の自尊心と羞恥心が軋む。

心臓がバクバクと鳴り響き、下腹部がキュンと切なくなる。

己の身体の変化に太一は戸惑った。

己のペニスに自信のない太一は、全裸を見せびらかす趣味などなかった。

むしろ、同年代のノンケに比べて慎み深く、公共の場で全裸になることなどありえないと確信している太一にとって、この状況は悪夢以外の何物でもなかった。

だというのに……

「おや？」

香月が声を上げた。

太一は下腹部の疼きに耐えかねてアナルをきゅっきゅと締めた。

だが、太一の変化は止まらない。

羞恥で全身を赤くしている太一の下腹部で、仮性包茎ペニスがゆっくりと皮を後退させ、羞恥の赤とは別のピンクを露わにしていく。

それは、性欲のピンク。

童貞のピンク。

太一が屋内とはいえ、公共の場で露出をしていることに欲情していることを、太一のペニスの膨らみと後退した包皮から覗くピンク色の亀頭が如実に示していた。

太一は勃起しつつある己のペニスを見られることに耐えかね、思わず手で隠す。

「御堂くん。

君は、露出狂だったのかい？」

「い、いいえ、違います」

香月の言葉に太一は慌てて首を振った。

けれど、その言葉が嘘であることは太一の手の中でゆっくりと勃起し続けるペニスが明らかにしていた。

「では、その手をどかしてみなさい」

香月が太一を追い詰める言葉を吐く。

尊敬する香月の言葉ではあったが、太一はそれでも手をどかすことはできなかった。

恥ずかしかったのだ。

ペニスを見せることが。

それも、露出して勃起しているペニスを見せることが、途方もなく恥ずかしかったのだ。

「どうしたのかな、御堂くん。

君にやましいところがないのなら、可愛い仮性包茎ペニスを見せられるはずだね。

それとも、まさか、全裸になっただけで勃起しているのを隠したいのかな？」

「……許してください、香月教授」

太一は手の中で完全に勃起してしまった己のペニスを隠したまま、香月に頭を下げた。

「そんなことでいいと思っているのかね？」

香月が太一の肩に手を乗せ、顔を耳元に近づける。

「君はこれから、多くの人間の欲望にその身を晒して支援金を得るのだよ。

それなのに、勃起ペニスを見られたくないなんて言っていて許されると、本気で思っているのかね？」

香月の手が股間を押さえる太一の腕を掴む。

「さあ、どかしなさい」

「……はい」

香月の言葉から逃げられない。

香月の言っている理屈は正しいからだ。

太一は、スケベファンで支援者の欲望に応じることと引き換えに支援金を得ることを選んだのだ。

ならば、全裸になったことで興奮しているペニスを見られることぐらい、耐えるしかないのだ。

太一の全身から羞恥を堪える緊張から汗がにじみ出る。

太一はゆっくりと、股間から手を離した。

ピン！

太一の手から解放された勃起ペニスが若々しく上を向いていた。

形に癖のない、平均的で平凡なペニス。

仮性包茎の皮がピンク色の亀頭の下方に残っている。

金玉も人並みの大きさと毛も生えていない。

性欲と無縁そうな爽やか系イケメンの太一が、性欲を秘めていることを如実に示している勃起ペニスが香月の目に晒された。

「ふむ、人並みだね。

恥ずかしがるのだから、短小か奇形を期待していたのだが、平均的で平凡で教科書に載せても違和感のないペニスで期待外れだったよ」

「……すみません」

露骨にがっかりした様子香月に太一は頭を下げた。

太一は、己のペニスに自信がない。

だが、平均的で平凡と言われると、悪事を見咎められたかのような居心地の悪さを覚えて仕方がなかった。

「まあ、君への説教はこのぐらいでいいかな。

君の全裸画像をアップロードして、スケベファン会員登録を終えよう」

香月がスマホとパソコンを操作し始めた。

しばらくして、パソコンの画面の左側に太一の全裸画像が表示された。

画像の中の太一は勃起前で、それだけが太一にとっては安堵できる材料であった。

勃起画像をアップロードするような変態だと思われなくなかったのだ。



「よし、君の会員登録が終わった。

では、スケベファンドの利用法について説明をしよう」

香月がパソコンを操作した。

登録スケベ一覧という項をクリックして開く。

そこには「全裸命令権」という文字列と、「支援者の人数に応じて開放されます」「獲得支援金の総額に応じて開放されます」という文字がずらっと並んでいた。

「見ての通り、初心者である御堂くんに許されたスケベは現状では一つ。

支援者からの全裸命令に服従する全裸命令権、のみだ。

スケベファンドは、自発的にスケベを提供し、享受する紳士の嗜みだからね。

最初から、抵抗の多いスケベは行えないようになっている。

だから、御堂くん、君はスケベファンド支援会員の全裸命令に従うことで支援金を得られる、というわけだ」

香月が更に、「全裸命令権」をクリックする。

全裸命令権（300 円/5 分）

生命・身体に危険が及ばない限り、会員は支援会員の全裸命令に従うこと。

支援会員は、所定の支払い方法で全裸命令権を購入の後、専用アプリの画面を提示することで該当会員に命令を行うこと。

なお、会員が生命・身体の危険によらない理由で命令を拒んだ場合、違約金が発生します。

「見ての通り、5 分間全裸を晒すことで君は 300 円の支援金を獲得できる。

つまり、一時間の全裸で 3600 円、というわけだ。

ああ、この金額は満額受け取れる。

支援会員サイトに提示されている金額から、管理手数料を差し引いた額が、会員サイトに提示される金額なのでね」

一時間で 3600 円。

太一が雇われている喫茶店でのアルバイト四時間分の額だ。

一瞬、太一はスケベファンドに参加することを決意した己の判断を誉めたくなくなった。

これならば、あてもなく働き続けるよりも父親の借金を返済する手助けができる。

だが、次の瞬間、太一は身売りをしてお金を得ることを好意的に捉えた己への嫌悪感が沸き上がった。

ごく普通の生活をしてきた太一にとって、身売りというのは遠い世界の話であり、己には縁のない話であり、何より、恥ずかしい事なのだ。

父親の借金を返す助けとなるため。

この思いだけが、今の太一を支えているのだ。

「それじゃあ、御堂くん。

早速私も支援させてもらおうよ」

「え……」

香月教授の言葉に太一は戸惑った。

今学期限りで退学する覚悟を固めていたとはいえ、太一は普通の大学生活への未練があった。

だから、スケベファン드를提案したのが香月であるとはいえ、尊敬する恩師である香月にスケベファンドで支援されるというのは違和感しかなかったのだ。

だが、香月はそんな太一に困惑を他所にスマートフォンを操作している。

そして、太一にスマートフォンの画面を突き付けた。

御堂太一の全裸命令権購入：60分

「というわけだ。

今から60分間、全裸のままでいなさい」

香月が上品な笑みを浮かべながら、太一にとって恐ろしい内容を口にした。

今から60分……

太一は教授室の壁掛け時計を見た。

もうすぐ昼休みが終わり、講義が始まる時間だ。

そして、次の講義は香月教授の大教室での講義で、太一も履修している。

……

「香月教授！」

太一は悲鳴を上げた。

太一は普通の大学生活への未練があった。

だというのに、多くの学生が集まる講義の場で全裸になったら、普通の学生生活など壊れてしまうではないか！

「どうして泣きそうな顔をするのかな？」

香月は太一の心の痛みなど理解していない様子だった。

香月が太一の肩を掴んだ。

「君への支援を手っ取り早く集めるには、君がスケベファンドをしていることを多くの人に知らせるべきだろう？

誰にも知られずに支援金が集まるなどという都合の良い妄想に浸っていたわけでもあるまいに」

香月が紳士的な笑みを浮かべたまま、太一の見込みの甘さを責め立てる。

論理的には香月の言葉通りだ。

スケベファンドで多くの支援を得るためには、多くの人にスケベファンドを知ってもらう必要がある。

けれど、大学は……大学でだけは、避けたかった。

顔見知りの人や友人がいる大学よりは、見知らぬ誰かに身体を差し出したかった。

「君は、顔は爽やかイケメンだが、肉体もペニスも人並みで、アピールポイントが少ないからね。

事実を告げるのは酷だと思うが、君程度の支援希望者は吐いて捨てるほどいるからね。

まずは顔見知りの人から同情で支援してもらい、支援者数を集めてより多くの者に知っ

てもらわなければならない」

けれど、香月の言葉が太一の見込みの甘さを容赦なく指摘してくる。

「貴重な最初の支援者でもある私の厚意を、まさか拒んだりはしないだろうね。

ただでさえ借金を抱えているお父上を助けたい君が、違約金という余計な重荷を背負ったりすることはないだろうね」

香月の言葉で太一は追い詰められていく。

香月の言葉通りだ。

父親の借金返済を手助けする太一が、違約金などという余計な借金を背負うわけにはいかない。

だが……だが！

太一の目から涙がこぼれた。

これから、友人を含めた学生たちに知られるのだと思うと、情けなさや悔しさで涙が止まらなかった。

御堂太一はスケベファンで身売りをしているだなんて！

「ううう、あ、あ、あ、あああああ」

太一は顔を手で覆って泣き始めた。

「泣くのはそれで最後にしなさい。

この程度で耐えられないようでは、スケベファンは地獄でしかないからね」

太一の背中を擦る香月の手は優しくだったが、その優しさは太一の涙を止めるのには力不足であった。

講義開始前でざわめく教室が静まり返った。

当然だろう。

太一は学生たちの不躰な視線を一身に浴びながら思った。

教授である香月の後ろを全裸でペニスを勃起させた学生が歩いていたら、誰だって何事か、と思う。

太一だって、注目してしまうだろう。

だから、不躰な視線に心がささくれても、見ないでくれ、と声に出して要望することは太一にはできなかった。

太一のペニスは勃起し続けている。

仮性包茎の皮は亀頭の根元まで後退し、女を知らぬ童貞のピンクをさらけ出している。

露出して興奮している己の痴態を衆目に晒している現実には太一は身体の震えを抑えることができない。

香月が教壇に立ち、手で太一を示した。

「見ての通り、御堂くんは全裸だ。

これは、彼が自ら望んだことである」

香月の言葉に学生たちがざわめきだした。

「うっそ……」

「あいつ、露出狂だったのかよ」

「チンポ勃起させてるし、変態だよな」

「ある日突然目覚めちゃった系？」

学生たちの憶測と心ない言葉が太一の自尊心を傷つけていく。

自尊心を泥のついた靴で踏みにじられているような屈辱に太一の顔が赤くなる。

「御堂くん。」

君の口から説明をしなさい」

香月が太一を追い詰める言葉を紡いだ。

自ら望んだこととはいえ、このような状況に追い詰められた己を、自らの口で説明するなんて、余りにも残酷だ……

だが、このまま理由もなく全裸でいると思われるよりは、状況を説明した方がまだ、ほんの僅かではあってもマシなのは事実だろう。

そう考えた太一は、重い口を開いた。

「俺は、父さんが連帯保証人になってしまって背負った借金を返済するために、スケベファンデに登録しました」

太一は教室を見回した。

学生たちの反応は様々であった。

スケベファンデ、という言葉が不思議に思っている様子の学生。

スケベファンデを知っているのか、好色の視線を向ける学生。

太一に軽蔑の目を向ける学生。

太一に同情の目を向ける学生。

その学生の視線も、太一の自尊心を傷つけるには十分すぎる鋭さがあった。

「どうか、皆さま、俺のために、スケベファンデでご支援をよろしくお願いします！」

それでも太一は学生たちに向かって頭を下げた。

恥ずかしさからくる身体の火照りで全身が融けてしまいそうだった。

消えられるものなら、今すぐ消えてしまいたかった。

だが、消えてしまえば父親の借金返済を手伝えない。

ならば、生き恥を晒したまま、屈辱の泥沼で藻掻くしかないのだろう……

香月の教授室で流し切ったはずの涙が再び溢れそうになった太一は歯を食いしばった。

「香月教授、質問です」

学生の一人が手を上げた。

「なんですか？」

「スケベファンデって何ですか？」

学生の質問に、スケベファンデという言葉が不思議に持っている様子の学生たちが頷く。

「スケベファンデとは、スケベファンデ機構の管理によって行われるクラウドファンディングです。

支援会員は、好みの会員にスケベファンデ機構経由で支援金を支払い、会員はそのお礼としてスケベを提供します。

今、御堂くんが全裸なもの、スケベファンデによって全裸になる命令を受けているからで

す。

御堂くんは」

香月がここで言葉を切り、学生たちを見回した。

「己の全裸を売ること、金銭を得る道を選択したのです」

香月の言葉は真実を的確に伝えるものであり、太一を屈辱で苦しめるのに十分な鋭さを持っていた。

太一の言葉に様々な反応を示していた学生たちの顔色が変化した。

家族のために、身体を売る太一への同情。

身体を売って金銭を得ることを選んだ太一への軽蔑。

学生たちの顔色からそれらを読み取った太一は、恥ずかしさと苦しさと胸が締め付けられるようであった。

せめて……せめて、己のペニスが勃起していなければ……

そうすれば、露出狂の変態だと思われずに済みそうなのに、ああ、どうして、己のペニスは勃起してしまっているのか……

太一は己を辱めるフル勃起ペニスが憎くて仕方がなかった。

他に憎めるものがなかったのだ。

「では、事情説明も終わりましたし、御堂くんは席につきなさい」

香月の言葉に太一はリュックサックを持ったまま、教室後部の空いている座席を目指した。

講義中も全裸を見られていると考えざるを得ない前方の座席に座るよりは、不躰な視線が向かない後部座席の方がマシだと思ったのだ。

「でもありえないよね、勃起チンチン」

「実は見られたがりだったんじゃないか？」

「綺麗な身体してるもんね、御堂くん」

「ペニスは人並みだけどな」

学生たちの横を通り過ぎるたびに、故意かそうでないのか、ヒソヒソ声が太一の自尊心を踏みにじるが、それでも、見られ続けていると考えざるを得ない前方の座席よりはマシだ。

そう考えなければやってられなかった。

太一は目的の座席につくと、座席を下ろし、そのまま座った。

裸の尻に座席の冷たさが伝わる。

「では、講義を開始する。

テキストの 87 ページを開きなさい」

何事もなかったかのように香月が講義を始めたのが太一にとっては唯一の救いであった。

## 奥付

『爽やかDD太一くんのスケベファンド 上』のサンプル

初出：2020年5月26日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)